

漆の実のみのる国(上)

藤沢周平

文藝春秋

漆うるしの実みのみのる国くに(上)

平成九年五月二十日 第一刷
平成九年六月五口 第三刷

著者 藤沢周平

発行者 和田宏

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二二
電話(〇三)三三六五一一

本文印刷 理想社

付物印刷 凸版印刷

製本所 中島製本

製函所 加藤製函

定価は函に表示してあります。万一
落し乱丁の場合はお取替え致します

© Kazuko Kosuge 1997 Printed in Japan

ISBN4-16-362760-X

漆の実のみ
のる国
(上)

たけのまたまきくまうな
竹俣美作当綱は髭の濃いたちである。朝に剃っても、夕刻には頬からあごにかけたあたりがかなり黒くなる。

髭もいっそのび切ればやわらかくなって、剃る手間もはぶけるのだが、国元勤めとは違い、米沢藩江戸家老として誰に会うかわからないいまは、そういうわけにもいかなかった。めんどろなことだと思いいながら、当綱は藩邸内の住居から表御殿の御用部屋に出仕するときは律儀に髭を剃ってくる。

当綱は手紙を読み終った。だが、すぐには巻きもどさずに、最後のところをもう一度つかみ上げて目を走らせた。手紙は国元の侍頭千坂対馬高敦からきたもので、現在郡代所頭取と御小姓頭を兼ね、藩政を一手に切り回している米沢藩最大の権力者森平右衛門利真とさねの近況を知らせている

のだが、手紙の最後は森をのぞく件は当綱自身がきて事にあたねば埒らちあくまいという文言でむすばれていた。

「ふむ」

当綱は、低く喉を鳴らすと、あいた片手であごをなでた。のびはじめた髭がざらざらして、痛いほどてのひらを刺戟する。目尻の切れ上がった目で千坂の手紙をにらみ、あごをなでながら当綱の明敏な頭脳は音を立てて回転している。

——森をのぞくことに反対はしない。しかし責任はおまえがとれということだな。

と当綱は思った。当綱は声を立てずに笑った。するといかつい江戸家老の顔に、思いがけない愛嬌のある表情がうかんだ。もちろん、このおれが始末をつけるとも、と当綱は思った。

このとき廊下を踏んで人がくる足音がしたので、当綱はいそいで手紙を巻きもどした。外桜田御堀通りにある米沢藩上杉家江戸上屋敷の建物は、ひさしい以前から傷みがきていて、事実は建替えを必要とするほどに占びているのだが、藩の財政状態は窮乏のどん底にあって天下に藩の体面が保てるかどうかというところまで追いつめられていた。とても屋敷の建替えどころではなかった。

藩主とその家族が居住する奥御殿のあたりには、どうにか修繕の手を入れているものの、江戸家老をはじめとする多数藩士が執務する表御殿は、屋根がこわれても修繕の費用を捻出出来ず、雨の降る日はあちこちで雨漏りがする。畳は破れ、廊下を歩けば根太がゆるんだのかそっくり返った踏み板がぎいぎいと音を立てる始末で、忍んで部屋を訪れるなどということは思いもよらな

い。

足音が御用部屋の外でとまり、侍医の薬科松伯わかしんしょうはくの声が、ご家老はおられますかと言った。その声を聞くと、当綱はすぐに立ち上がった。

「おりますぞ。どうぞお入りください」

言いながら当綱は、いそいで自分で襖をあけ、松伯を部屋に迎え入れた。薬科松伯は二十六歳。八歳の齡下だが当綱の学問の師である。もともと当綱が自分の手で襖をあけたのは、かならずしも儀礼のためばかりでなく、かたむいた襖をあけるには若干の力とコツを必要とするので、非力な師のために手を貸した気味もあった。

「御書院の帰ります」

と松伯は言った。

薬科松伯は医師であるが儒者としても傑出している人物で、三年前に藩主大炊頭重定の侍医に挙げられたのにつづいて、一昨年から藩世子直丸君の素読師範を勤めていた。松伯は若年ながら国元では家塾をひらき、その書斎菁莪館せいゐかんにあつまる青少年の中から、当綱や荻戸九郎兵衛善政のぞきくろべえよしまさ、木村丈八高広じやうはちたかひろらの俊秀を教え育てた人物なので、世子の素読師範にはこれ以上の人はないと思われる。松伯はその素読教授の帰りに、当綱の御用部屋に立ち寄ったのだった。

当綱は一礼して師をねぎらった。

「それはごくろうさまでござりました。で、直丸さまのご学問は、近ごろいかがですか」「それがです、ご家老」

と松伯は言った。

「元来が明敏の御素質をそなえておられる上に、ご実家のお仕込みがよほどよろしかったとみえて、いやはやご学問のはかどること。いずれはそれがしのような儒者ではなく、天下に知られる碩学を招いてあのお方の師となさるべきでしょう」

それにはまた費用がかかるだろうな、とちらと思ひながら当綱は言った。

「それはたのしいことでごさる。ご実家の三好どのお仕込みがよろしかったのでしうな」

世子の直丸は、一昨年 of 宝暦十年に正式に米沢藩主上杉重定の養子に決まり、麻布一本松の高鍋藩邸から外桜田の米沢上屋敷に移ってきた少年で、当年十二歳だった。その養子入りに際して、直丸を幼少時から訓育してきた高鍋藩の老臣三好善太夫重道が、二度にわたって養家の人となる心構えを記した訓戒書をあたえたいらしいという風聞を、当綱も耳にしていってそう言ったのだが、松伯は意外にあっさりとそうかも知れませんでしたただだった。

蘆科松伯は青青と頭を剃り、瘦せていて、坐っているときの姿勢が見事な人物だった。背と首がびしっとのびているのに固さはなく、資全体はやわらかくて気品があふれて見える。当綱はそういう松伯を見るたびに、清瘦という言葉を思ひ出すのだが、時にはそのあまりに清らかな瘦せように、なんともいえない懸念を持つことがあった。

懸念はまず、師はご病氣なのではあるまいかということだが、それだけではない漠然とした不安もふくんでいた。

たとえばその超俗に過ぎる風姿ゆえに、師がある日忽然とこの世から消え失せることはあるま

いかといったたぐいの、現実にはあり得ない、しかしないと否定もし切れないような不安感に当綱は取り憑かれることがある。松伯の瘦身と青白い顔貌には、そういう理由の判然としない不安を掻き立てるものがあつた。

そういう不安の出どころについては、当綱にも心あたりがある。薬科松伯は明察の人だった。家塾の善哉館で、經書を講義するかたわら、松伯は当綱らに、経済的な苦難にのた打ち回っている米沢藩の病理がどこにあるかを、掌を指すように示してみせたことがある。

松伯の指摘は、藩窮乏の原因をとかく過ぎ去つたむかしの非運、関ヶ原役後の慶長六年に食邑四分の一の三十万石に、さらにそのおよそ六十年後の寛文四年に藩主の急死によって半分の十五万石に減らされたあたりにもとめがちな当綱らの心根に一撃を加えるものだった。

米沢藩の禄高は、会津百二十万石と言われた時代のほとんど八分の一に減ってしまった。窮乏の背後に横たわっているこの事実は、一藩を無氣力にするに足りるほどのものである。しかし松伯は、過去の急激な減封が、いまもいたるところに歪みを残しているのを認めながら、しかし十五万石には十五万石のやりようがあることを言い、そのためにあるべき藩経営の姿を阻んでいる障害物をいちいち取り上げて解き明かしてみせたのだった。

その明快な洞察と指摘は、当綱や位戸善政ら、善哉館にあつまる若手藩士たちの目から鱗を落としたばかりでなく、その心中に藩改革に対するかすかなのぞみを呼び起こすものだったのである。

もしも中途にしてこの師を喪うようなことがあれば、ほんの少し芽ばえたばかりの藩改革の行

方はたちまち舵を失った舟のごとくになろう、と当綱はつねづね思うのだった。過剰な不安はそのあたりから生まれてくるものに違いない。だからその不安に突きあたると、当綱はいつも大いそぎで打ち消しながら、こう思うのである。

——先生は医家だ。ご自分の身体のこととは誰よりもご自分がおわかりだろう。

二

いまでも、当綱が一瞬通りすぎたその考えを追っていると、松伯の声がした。

「直丸さまは、ただ賢いばかりではござりませんぞ、ご家老」

その強い声にはっと目をもどすと、松伯が怪しむように当綱を見ていた。つかの間の放心を気づかれたらしい。

「いや、さもありましょう、さもありましょう」

いそいで言った。当綱は勘がわるい男ではない。松伯は、世子についてまだ何ごとか話したいことがあるのだと思った。慎重な口調で聞いた。

「今日は、ほかにも何ごとかござりましたかな」

「ご世子さまがお泣きになられました」

「ほう」

当綱は大きな目を松伯に据えた。松伯の弟子ではなく、江戸家老の顔になっていた。十二歳に

もなつて、人前で泣くとは柔弱なことである、と思つたのだ。世子にはそのような一面があるのか。

「それは、どういふことですか」

「ご勉強を終えられたあとで、いつものように米沢のお話をいたしました」

と松伯は言つた。

松伯は直丸に、経書そのほかの当日の素読を指導し終つたあとで、直丸がやがて藩主として赴く土地である米沢藩の歴史、地勢、氣候、さらには産物、人情といったことを、少しずつ進講していた。江戸生まれの、ことに三万石という小藩の出である世子に、十五万石の領国の姿を大まかに知らしめるのが目的だが、もちろんこのことは松伯が独断でしていることではなく、当綱と相談し、藩主重定の諒解も得た上でやっていることである。

さいわいに直丸は、松伯がする国元の話に興味を示した。大方は黙つて聞いているだけだが、進講の合間に少年とも思えない鋭い質問を放つて、松伯をおどろかせることがある。決してなござりに聞きながしているのではないことがそれでわかつて、松伯は素読の教授だけでなく、こつちの話にも力をいれていた。

「本日は、わが藩の人別錢についてお話いたしました」

「いかに窮したとはいへ、あれは稀代の悪税でござる」

「世子さまがお泣きになつたのは、その人別錢の話が佳境にさしかかつたところでござりました」と松伯は言つた。

その少し前から松伯は、直丸が伏し目がちになり、頭を垂れるようにしているのに気づいたが、いくらか不審な気はしたものの、かまわずに話をすすめた。ただお行儀のわるいことをなさると思ひ、進講が終ったあとでひとこと訓戒すべきだろうとは思っていた。

ところが直丸は、その姿勢で泣いていたのである。袴の上に滴滴と落ちる涙を見つけた松伯は進講をやめ、なぜお泣きになるかと鋭くたずねた。

「するとご世子さまは懷紙で涙をぬぐわれ、落ちついたお声で不覚を詫びられたあとで、こう言われました。それでは家中、領民があまりにあわれである、と」

松伯のその言葉を聞いたとき、当綱は背骨から後頭部まで、何かしら名状しがたいぞくりとするものが駆け上がったのを感じた。

米沢藩は過去に三度、家中、領民から人別錢、またの名を人頭税と呼ぶ悪税を取り立てている。享保四年に、時の藩主吉憲が参勤のために出府する費用が調えられずに課したのがはじめで、つぎは八年前の宝暦四年、前年末に幕府から命ぜられた東叡山の修理と仁王門再建の助役という国役の費用捻出に窮したときである。そして三度目は四年前の宝暦八年に、やはり藩主重定の出府費用の工面がつかずに課したものである。

宝暦八年の人別錢の中身は、五百石以上の家中は妻子とも五十文、百石以上は三十文、五十石以上は同じく二十文、五十石未満の家中と町人、農民は戸主は十五文、家中の下男下女と、町人、農民の戸主以外の家族は一人につき十文、下人、門屋借りは八文と定められた。

この人別錢は、宝暦八年二月から九月までの八カ月間という触れ出しだったのに、満期になる

とさらに徴収が継続され、翌年になって税額を雀の涙ほど下げただけで現在も続けられている。しかも森利貞が取り立てているたゞいまの人別錢の苛酷なところは、同じ税を国元だけでなく、江戸詰の家中、小者、婢はしため、また理由あつて他国に出ている者にも残らず割りあて、徴収していることだつた。

蘆科松伯は、學問に人格の陶冶をもとめるだけでなく、実學ということを重ねる儒學者である。米沢藩の歴史、地理などの大要を進講することを大義名分に掲げているものの、世子に米沢の話を聞かせる松伯の真意は、主として、税吏が歩いたあとには草も生えないというほどの藩のたゞいまの状況を飾りなく進講することにあるのを、藩主はともあれ、当綱は見抜いていた。松伯のその話を聞いて世子が泣いたのは、藩の実情を理解したということになるだろう。理解して衝撃をうけ、十二歳の世子が意見を言つたのである。

——意見？ いや、違ふな。

と当綱は思つた。泣いたのは、やがて自分が統治することになる領国が、話のような苦難の土地であることを知つて怖おじたわけではない。家中、町人、農民の慘憺とした暮らしに思いをいたしたのである。それはつまり、仁慈ということだろうか。松伯はそう言いたいのだろうか。

しかし直丸は、十二歳の少年である。そしてあえて遠慮ないことを言えば、世子とはいへ、つゝいこの間外からきたよそ者にすぎない。松伯が言いたがつてゐるようなことがあり得ようか。

当綱が黙然と松伯を見つめてゐると、松伯がご家老と言つた。

「われわれは、たゞい稀な名君にめぐり会つたのかも知れません」

「しかし、まだ御齡十二歳であられる」

松伯の顔はめずらしく赤味を帯びている。その顔に静かな微笑をうかべながら、松伯は首を振った。

「いいえ、お齡はかわりござりません」

松伯はきっぱりと言うと、幸福そうな微笑をひっこめて一礼し、膝を起こそうとした。その松伯をひきとめて、当綱は身体をのばすと机の上の手紙を取った。

「対馬から手紙がとどきました」

「いかがでしたか」

「対馬は、手を回して森の屋敷にひそかに伏嗅ふしかきを入れるのに成功したそうにござる。その結果、うわさになっておった森の豪奢な暮らしぶりを確かめ得たと申しています。こう書いてありますな」

元馬喰町の旧宅から移るために、表町に新築した森利真の屋敷は、地盤を高く積み上げ、ひときわ高い黒塗りの門と塀をめぐらして、まるで城のようだと言われた。そして中の屋敷についても、部屋は金銀造りだとか、庭園には山があるとか、さまざまうわさがささやかれてきたが、伏嗅が確かめたところによるとうわさはほぼ事実で、森の屋敷の座敷という座敷には金銀がちりばめられており、居間にはギヤマンの長押なげしをめぐらして、そこに金魚が飼われていた。

また庭にはうわさ通りの山が築かれていて、奇岩怪石が布置され、築山から流れ落ちる水で水車が回っているというぜいたくぶりだったが、おどろくべきことにここには、屋敷と庭を見回り

修繕掃除するために常時三十人の人夫が雇われている、と千坂は書いていた。伏嗅というのは藩の探索組織である。

そしてさらにと千坂の手紙はつづいて、森の屋敷の堀の内側に建つ曰くありげな土蔵のことに触れていた。その土蔵には、うわさする者がいるようにかなりの人の出入りがあつて、物を収納するだけの蔵とは思われなかったが、さすがの伏嗅もそこまでは入りかねた。しかしここまでの調べをみただけでも、領民の窮乏をよにした森の驕奢ぶりはおどろくほかはない。

当綱が読み上げる千坂の手紙を、松伯はじつと聞いていた。そして終ると顔を上げて言った。

「このお手紙は、色部さまにも見せられましたか」

色部というのは、やはり江戸家老を勤める色部修理いろべしゆり照長のことである。当綱が森排斥の相談をかけている重職の一人だった。江戸家老はもう一人、同職では一番古い広居左京清応きよまさがいて、広居は千坂の実父であるが、相談相手としては筋が違うので当綱は森排斥の謀議のことは広居には秘匿していた。

「色部は帰国中でござる。むこうで千坂なり、芋川なりがくわしく話して聞かせるものと思ひます」

「そうですか」

松伯はうなずいてから、念を押す口調で言った。

「いま申された方々と、つねに意思を通じておることが肝要です。くれぐれも独断専行をお慎みなされますように」

「ご教訓、肝に銘じておきましょう」と当綱は言った。

奸物森利真排除すべしという旗印のもとにあつまっているのは侍頭千坂対馬高敦、江戸家老色部修理昭長、奉行芋川縫殿正令、そして当綱の四人である。呼びかけて四人の結束をまとめたのは当綱だが、松伯はその結束を大切にせよと言っているのだった。

藩政から森を排除する工作が、先ざき森誅殺という形で始末がつくことは大いに予想されるどころだが、この場合は藩主重定に対する事後釈明がひとかたならぬ厄介事として残ることになる。森利真は、もともとは上級家臣である侍組に属する森家の出だが、次男だったので一族の与板組森武右衛門の跡目を継いだ。与板組は中級家臣で、藩主の旗本とされる三手組のひとつといっても、森が継いだ武右衛門家は二人半扶持三石取りの微禄だった。生家は四百石で、父も兄も侍組所屬であっても、次男となると境遇はこのように違ってくる。

その微禄の家を継いだ森に日があたったのは、森二十六歳の元文六年のことで、この年森は当時まだ部屋住みだった現藩主重定の御小姓となり、新知三十石の取り立てを受けたのである。そして重定が藩主になると、森は御側役から侍組編入、御小姓頭次役、御小姓頭とめざましい累進をとげ、現在は藩政を一手ににぎる郡代所頭取という最高権力者の地位を占めている。その間禄高の方も加増につぐ加増を重ねていまは三百五十石、森はまさに藩主重定の信頼を一身にあつめる寵臣というべき存在だった。

その森の政治がけしからんと、許しも得ずに謀殺したりすれば、重定の激怒は必至で、対応を